

広島大学総合科学部報

# 飛翔

第89号

特集

西条巡り～サイメグ～

広島大学

総合科学研究科・総合科学部

広報・出版委員会

飛翔編集委員会

# 飛翔 89号

## 目次

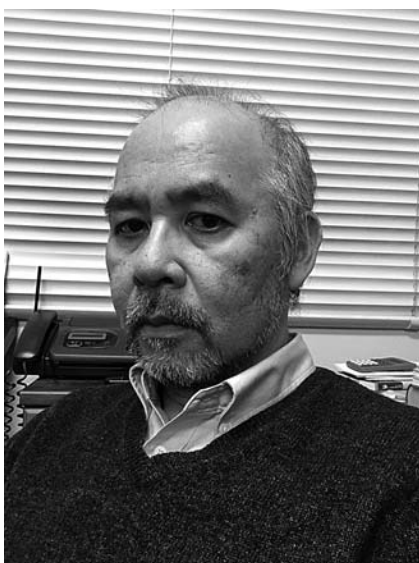
巻頭言	p. 2
研究室紹介	p. 5
特集	
西条巡り	p. 23
輝いている人	p. 26
OB・OG 紹介	p. 33
レビュー×レビュー	p. 38
飛翔な日々	p. 42
編集後記	p. 46

表紙・裏表紙 担当 古川幸実

# 巻頭言

船瀬 広三

(学士課程教育担当副研究科長)



## 新入生へのメッセージ

「総合科学部で実感した学生の可能性」

広島大学大学院総合科学部新入生の皆様、入学おめでとうございます。大いなる希望を

胸に大学生活を歩みはじめたことと思いません。新年度から学士課程教育担当副研究科長に就任したこともあり飛翔巻頭言を担当することにになりました。私自身の総合科学部・総合科学研究科での経験を回顧することで、自身の今後の指針を再確認し、新入生の皆さんへのメッセージになればと考え、このようなタイトルとしました。

まずは自己紹介から。一九五七年生まれの私は、見た目はともかく、日々の短時間トレーニングで迫りくる老化を防ぎ、体力と気力を維持するよう努める今日この頃です。新たな博士課程を設置するという魅力に誘われて前任地から総合科学研究科に赴任して節目の十年が経過したところです。赴任初年度は研究室に一人でいる時間が長く、実験するのも学会に行くのも一人という寂しい時間を過ごしたことを覚えています。二年目の後期から、私の「身体運動制御学」の講義を聴いて興味を持ってくれた三年次生三名が研究室に参加してくれました。当時この分野を専門とする教員がいなかったこともあり、新鮮な印象を持ってくれたのかもしれませんが。

三名の内、二名が総合科学研究科に進学しました。一人の学生は、卒業研究で興味深い結果が得られたこともあり、その内容を原著論文にまとめて関連学会の機関紙に投稿しようということになりました。最初の学術論文の執筆ということもあり、私も手助けしましたが、無事に査読審査を経て掲載されました。大学院進学後二編目の論文を国際学術誌に投稿する際には、それまでの国際学会での発表などの経験を生かして、英語論文にも関わらず自力で初稿を書き上げました。若干の手直しを経て投稿し、二度にわたる厳しい査読審査を経た後、見事に論文掲載にまで至りました。その後は、自分自身で立案した研究計画に基づいて実験し、データをまとめて論文を書いて投稿するという、研究者に必要なスキルを身につけました。今では、二年間のドイツ留学を経て、自立した研究者の道を歩み出しています。一人が先鞭をつけると、後に続く者もその影響を受けます。その後、私の研究室に所属した博士課程後期の学生も、同様の経過をたどることになりました。

この大学院生達による一連の研究活動の

足跡は、志のある若い皆さんの潜在能力が如何に高いものであるかを如実に物語っています。興味を持てる研究対象に出会い、それについて調べる機会に恵まれ、成果を発表し、学界から評価されることを経験すると、意識が覚醒し、自らの意志でどんどん知識を吸収していく、正に指数関数的な成長過程を目の当たりにしました。私が経験したこの事例は、研究活動に関するものですが、学部卒業後、就職して実社会の各分野で活躍している総合科学部卒業生にも、同様に当てはまることではないかと思えます。

この話を聞いて、新入生の皆さんはどのような感想を持つでしょうか。「そうは言っても、自分には関係のない話じゃないか」、あるいは、「自分も総合科学部でやりたい研究をやってみよう」など、いろいろな感想を持つでしょう。もちろん後者が多いことを望んで止みません。

ここまで書き進めて、もうお分かりかと思いますが、本稿で新入生の皆さんに伝えたいメッセージは、「自分でも気づいていない自分自身の可能性を見つけてほしい」というこ

とです。「見つける」というと「自分探し」を連想すると思いますが、アイルランドの文学者で教育家の George Bernard Shaw (1865-1950) は、「人生とは自分を見つけることではない。人生とは自分を創ることである。- Life isn't about finding yourself. Life is about creating yourself -」と言っています。自分が何者かもわからないのに、自分を探すことは困難でしょう。数ある選択肢の中から何かの縁で総合科学部を選んで入学してくれた新入生の皆さんには、是非「自分を創っていく」意欲を持つてほしいものです。文系か理系かという枠組みだけでなく、その後の人生が決まる訳ではないのです。社会はそんなに単純なものではありません。

具体的な例を考えてみましょう。高度医療技術の進歩によって不治の病が克服されることは、誰もが望む輝かしい科学の成果と言えるでしょう。世界中の多くの科学者がこの目標に向かって日夜努力しています。まずは、それが可能であるかどうかについて徹底的な科学的検証が行われます。首尾よく実現化したとしても高度医療技術の提供には多額

のコストがかかります。一回の投与で何十万円もする薬もあります。そのコストを誰が負担するかは社会的に大きな問題になります。現在のように国民皆保険制度の中で実施するには、保険料の増額や国費の投入増大は避けられないでしょう。政治的には相当高いハードルです。個人負担ということになれば経済的に余裕のある人以外は、その恩恵を受けることは難しくなります。そうになると、おそらく民間企業によって新たな保険が商品化され、多くの国民がその保険に加入することになるでしょう。結果として現行の国民皆保険制度は形骸化する可能性があります。これは、憲法 25 条「生存権」の理念に根ざした社会保障制度として国主導の保険制度から、営利追求を目的とする民間主導の保険制度へ変質を意味します。また、不治の病が克服されて平均寿命が延びたからと言って、皆が健康で自立した生活が営めるようになるわけではありません。介護や福祉の問題にも影響が及ぶでしょう。長期的には死生感や宗教観も変容していくかもしれません。例としてあげた一つの問題をとってみても、科学、政

## 巻頭言

治、経済、法律、人権、宗教など、様々な分野の問題が複雑に絡み合っていることがわかります。このような複雑な問題に対処するには、多くの専門家の英知を集めるよりほかありません。重要なのは自分の専門分野以外からの「多角的視点」が理解できる専門家になることです。ようやく総合科学部の理念の重要なキーワードである「多角的視点」にたどり着きました。ここに総合科学部で学ぶ大きな意義があります。もちろん、自分の専門分野はしっかりと深めるものです。そして、専門分野以外にも理解して利用できる柔軟な考えを持った専門家を目指してほしいのです。

思いつくことを書き述べてきましたが、そろそろこのあたりにおきましょう。新入生のみなさんの今後の健闘を期待するとともに、学士課程教育担当副研究科長として皆さんの学習を支援できればと思っております。